

令和2年度外部評価報告書

令和3年6月

独立行政法人国立美術館外部評価委員会

目 次

はじめに	2
------	---

1 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開

(1) 多様な鑑賞機会の提供	3
ア 所蔵作品展	3
イ 企画展	4
ウ 上映会・展覧会（国立映画アーカイブ）	5
エ 巡回展・巡回上映	5
(2) 美術創造活動の活性化の推進	6
(3) 美術に関する情報の拠点としての機能向上	6
(4) 教育普及活動の充実	6
(5) 調査研究の実施と成果の反映・発信	7
(6) 快適な観覧環境等の提供	7

2 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成・継承

(1) 作品の収集	8
(2) 所蔵作品の保管・管理	8
(3) 所蔵作品等の修理、修復	8
(4) 所蔵作品の貸与	9

3 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与

(1) 国内外の美術館等との連携・協力等	9
(2) ナショナルセンターとしての人材育成	9
(3) 国内外の映画関係団体等との連携等	10

おわりに	11
------	----

はじめに

当委員会は、独立行政法人国立美術館（以下、「国立美術館」という。）の令和2年度事業について、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、5月及び6月に予定していた外部評価委員会を書面による審議に変更し、本報告書を取りまとめた。

国立美術館は、第1期中期目標期間（平成13年度から平成17年度）、第2期中期目標期間（平成18年度から平成22年度）及び第3期中期目標期間（平成23年度から平成27年度）を終了し、令和2年度は第4期中期目標期間（平成28年度から令和2年度）の最終年度である。当委員会は、第4期中期計画の3つの柱、「1 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開」、「2 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成・継承」、「3 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与」ごとに評価を行った。また、できる限り国立美術館を全体として捉えて評価することに努めるとともに、これまでと同様に国立美術館の業務の質について評価を行うものとし、財務状況等に係わる事柄については監査法人等の監査に委ねることとした。

この評価・提言が、国立美術館の今後の活動の充実・発展に資することを強く願うものである。

なお、評価に当たっては、令和2年度業務実績報告書等のデータを参照した。

1 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開

(1) 多様な鑑賞機会の提供

国立美術館は、その中期目標において、我が国の美術振興の中心的拠点として、学術的意義、国民の関心、国際文化交流の推進等に配慮しつつ、展覧会等を通じて多様で秀逸な美術作品の鑑賞機会をより多くの国民に提供することを求められている。

令和2年度は、法人全体として所蔵作品展と企画展、地方巡回展を、映画については上映会・展覧会、巡回上映を開催し、これらを合計すると延べ1,373,158人が国立美術館の展覧会又は上映会に来場した。この数字は、前年度の入館者数（令和元年度3,777,787人）を大幅に下回ったが、新型コロナウイルス感染症予防対策による臨時休館や入場制限、展覧会の会期変更など、コロナ禍での予期せぬ事態の連続で、入館者数や教育普及事業の参加者数が目標値に届かなかったのは、残念ではあるがやむを得ない結果である。国立西洋美術館及び国立国際美術館にて開催した「ロンドン・ナショナル・ギャラリー展」は、目標値を大幅に上回る数字を出していたと推測され、その他の各館の主要企画展も同様だったと思われる。

一方で、このような状況のなか、展覧会に足を運ぶことができなくても、自宅にしながら美術館の作品や展示、建物、イベントを楽しめるコンテンツを、館HP、公式youtubeチャンネル、SNS、外部メディアで公開するなど、様々な試みを模索しつつ展開し、鑑賞の機会を積極的に提供したことは高く評価できる。

国立美術館は、職員数も少なく組織も小さいながら、我が国の美術振興の中心的拠点としての役割を果たすべく、展示企画や関連イベントの実施など、様々な試行や工夫を重ねつつ、自己収入の増加にも尽力している。こうしたコロナ禍のなかで、質の高いサービスを提供するためにも、予算や人員の削減が行われることのないよう関係者の理解を求めたい。

ア 所蔵作品展

法人全体として延べ781日、17回開催し、370,491人の入館者があった。

東京国立近代美術館では、展示替えごとに、テーマ設定、展示方法、解説などに創意工夫を凝らし、所蔵作品の魅力をわかりやすく紹介しており、美術館の調査研究、作品収集、保管といった本質的な作業が着実に実施されていることは高く評価できる。また、夏の会期には、国立工芸館の石川県への移転を予告する特集をハイライトコーナーで行い、工芸ファンへの配慮を示したことや、テーマを絞ることでより集中して作品を鑑賞できる小企画展をジャンルを変えながら続けている点は、幅広い観客層への配慮がうかがえて評価できる。

京都国立近代美術館では、京都を中心とした関西圏の美術、とりわけ工芸の紹介を掲げている館の運営方針に沿いつつ、特色あるテーマを設定している点は評価できる。また、キュレトリアル・スタディーズのコーナーは、研究職員たちの調査研究から生まれた新しい視点が提示されていて新鮮な企画であった。

国立西洋美術館では、質の高い西洋の美術作品を静謐な展示空間の中で鑑賞でき

る得難い場となっている。前年度に引き続き実施された小企画の《内藤コレクション展》は、国内ではあまり観賞する機会がない西洋中世美術の魅力を丁寧に紹介するものとして好企画であった。

国立国際美術館では、国内外の現代美術を意欲的に紹介し続けている点は評価できる。

また、各館において、教育普及事業と有機的に連携し、所蔵作品解説の動画配信など、オンラインを活用した情報発信を積極的に展開したことを高く評価する。

イ 企画展

法人全体として延べ1,019日、18回開催し、903,895人の入館者があった。

東京国立近代美術館の「ピーター・ドイグ展」は、作家の日本で初めての本格的な紹介としての意味は大きく、大変興味深い企画であった。また、「眠り展：アートと生きること ゴヤ、ルーベンスから塩田千春まで」は、国立美術館の所蔵作品の豊かな蓄積を美術の本質に迫る興味深いテーマ設定の中で楽しく見せる好企画であるとともに、布とグラフィックを巧みに組み合わせた斬新な会場構成も展覧会テーマを理解する上で効果的であった。

国立工芸館は、コロナ禍のなかでの石川県への移転開館となったが、「国立工芸館石川移転開館記念展Ⅰ 工の芸術— 素材・わざ・風土」展は、地元にも十分配慮しつつ日本の工芸の精華を紹介する内容構成で、開幕展にふさわしいものであった。

京都国立近代美術館の「人間国宝 森口邦彦 友禅／デザイン 交差する自由へのまなざし」展は、友禅染の技術保持者である京都在住の森口邦彦の世界を紹介したものであるが、伝統の技を守りながらも、その技を現代的なデザインと融合して、新たな表現世界を模索し続ける姿を着物、デザイン原画、グラフィック作品などを巧みに組み合わせて多角的に紹介している点は興味深かった。単に一人の作家の個展というだけではなく、伝統の中から常に革新的なものを生み出してきた京都の文化土壌の特色もうかがえるものであった。

国立西洋美術館では、「ロンドン・ナショナル・ギャラリー展」は、同館が海外で初開催する所蔵品展ということであったが、15世紀から19世紀末までの各時代、国を代表する作品が期待以上に多数展示され、日本における西洋美術の理解を深めることに多大な貢献をしたことは高く評価できる。企画構成に当たった研究職員たちの深い見識と熱意が十分にうかがわれる。

国立国際美術館は、世界的に活躍するアーティスト、ヤン・ヴォーの全貌を明らかにする、日本の美術館における初個展を開催するなど、国内外の現代美術を意欲的に紹介し続けてきているが、コロナ禍の影響で本来ならば観客の期待に十分に答えられる企画展（「ヤン・ヴォー ーオヴ・ンヤ」展、「ロンドン・ナショナル・ギャラリー展」）が十分な形で公開できなかったのは残念であった。

国立新美術館の「古典×現代 2020—時空を超える日本のアート」は、新しい表現者として現在活躍する美術家たちが、日本美術の豊かな土壌を糧として生まれてきたことを見せる好企画であった。少ないスタッフで、大型の共催展を実施しなけれ

ばならない美術館だが、そのなかでこうした誠実な調査研究に支えられた展覧会を実現したことは高く評価できる。

各館において、コロナ禍による開館時間の短縮や臨時休館等が求められるなか、デジタル・プログラムの強化やオンラインでの発信など、様々な試みを模索し展開したことは評価できる。

ウ 上映会・展覧会（国立映画アーカイブ）

上映会については、延べ243日、10回開催し、49,089人の入館者数となった。前年度（延べ246日、12回開催、76,592人）に比べ、日数・回数・入館者数ともに下回った。

展覧会については、196日、3回開催し、10,129人の入館者数であった。前年度（235日、3回開催、15,773人）に比べ、上映会同様に下回った。

入館者数が下回ったのは、新型コロナウイルス感染症予防対策による臨時休館の実施や、再開後の定員制限、コロナ禍の影響による上映会中止や延期等によるものであるが、一方で感染症対策を徹底したことにより、安心して来館できる環境を整えたこと、さらに、上映映画のラインナップの充実や魅力的な企画を実施したことは評価できる。

国内外に目を配った多彩な特集上映は、年間を通してバランスよく実施したほか、73会場に及ぶ優秀映画鑑賞推進事業などの各地への巡回上映並びに興味深い展示活動の実施など、映画に関する理解を広める努力を続けている点は高く評価できる。

上映会「松竹第一主義 松竹映画の100年」では、100年に及ぶ松竹映画の膨大な作品の中から、評価の定まった名作だけでなく、これまで批評的にも言及されることの少なかったアニメーション作品や時代劇作品、松竹が外部プロダクションと提携した作品や配給した作品なども紹介し、松竹映画の多様性を提示した。

展覧会「公開70周年記念 映画『羅生門』展」では、黒澤監督生誕110年に当たり、脚本・撮影・美術・録音・音楽と多様な視点で観ることができ、大変意義深い企画であった。

巡回上映・館外共催活動は、コロナ禍の影響により、一部オンライン配信を行うなど工夫を凝らし実施したことは評価できる。

エ 巡回展・巡回上映

令和2年度の国立美術館巡回展（京都国立近代美術館担当）は、北海道立旭川美術館（北海道旭川市）及び高崎市タワー美術館（群馬県高崎市）において「京の美術一洋画、日本画、工芸」を計88日間開催し、延べ9,381人の入館者があった。

国立映画アーカイブの優秀映画鑑賞推進事業は、全国73会場で延べ153日間にわたり上映し、15,783人の入館者があった。

これらの巡回展は、国立美術館の所蔵作品や活動を全国の人に広く知ってもらふ貴重な機会であるとともに、鑑賞機会の少ない地域の鑑賞機会の充実、地域文化の振興に寄与するという意味においても重要である。今後も、所蔵する作品やフィル

ムを効果的に活用し、ナショナルセンターとしての役割を確実に果たしていくことを期待する。

巡回展・巡回上映は、今後も公私立美術館及び上映施設等からの要望を踏まえ、継続的に実施していくことを期待する。

(2) 美術創造活動の活性化の推進

国立新美術館においては、引き続き全国的な活動を行っている美術団体等に公募展示室の提供を行っている。令和2年度は34団体が公募展を開催し、その入館者数は189,008人であった。公募展示室の稼働率は目標の100%を下回り99.2%であったものの概ね達成しているが、一方で、近年において所属会員の減少や高齢化が進む団体が増えてきており、今後、公募団体の展示室の稼働率が低下していくことも考えられ、注視していく必要がある。

(3) 美術に関する情報の拠点としての機能の向上

近年、各方面で日本国内にある美術品のデータベース化及びその公開の必要性が指摘されていることから、国立美術館では、平成26年度に策定した「国立美術館のデータベース作成と公開の指針」に基づき、「国立美術館のデータベース作成と公開に関するWG」を設置し検討を進めており、国立美術館の公開情報資源を一元的に検索・閲覧できるゲートウェイ・システムを開発中である。令和2年度は、引き続きゲートウェイ・システムの開発を進め、試行版を法人内で共有し、公開に向けた準備の最終段階を迎えている。

これらのデータベースの整備やオンラインでの発信等、ICTを活用した取組は、今後の美術館運営の大きな力となり得るものである。特に、新型コロナウイルス感染拡大防止による臨時休館や再開後の入場制限など特殊な状況下で、所蔵作品のデジタル化の重要性が改めて認識されたが、その重要性は今後ますます高まると思われる。人材確保や予算面で大きな負担となるが、これを機に一層のスピード感を持ってICT活用の取組を進めていくことを期待する。

(4) 教育普及活動の充実

国立美術館においては、鑑賞者が美術作品や作家についての理解をより深めることができるよう様々な取組を進めている。令和2年度は、法人全体として、展覧会と連動した講演会やワークショップ等を延べ226回実施し、参加者は8,191人であった。例年より参加者数が著しく減少しているが、新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡大防止のため、臨時休館を行ったことや、再開後も安全面を考慮して、対面による多くのイベントが中止となったことによるものである。このような状況下において、各館では、オンラインコンテンツの充実など、様々な工夫を凝らし、内容的に質の高いプログラムを提供したことは、高く評価できる。

展覧会以外の活動は、通常の来館者には見えにくいですが、展覧会解説、レクチャー、子供のためのワークショップなど、美術館、展覧会への理解を深め、親しみを持って

もらうために、各館ともに多彩なプログラムを展開して、できる限りの努力を行っている。

また、美術への興味、鑑賞への導入は、小・中学校の教職員に頼るところが極めて大きく、それを踏まえ、教職員に対する美術鑑賞教育の取組がなされているのを高く評価する。

国立美術館が、今後も各館においてそれぞれ工夫を凝らし、「新しい生活様式」に対応した教育普及事業を実施し、幅広い層の人々に向けたプログラムを充実させていくことを期待する。

(5) 調査研究の実施と成果の反映・発信

展覧会（所蔵作品展を含む）の開催や教育普及活動等に伴い、国立美術館全体で117件の調査研究が行われた。また、学会等発表が55件、学術雑誌等論文掲載が156件、所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムが5件、国内外の美術館等との連携（シンポジウム）が13件となっている。

展覧会図録の作成のほか、充実した館ニュースを定期的に刊行、科研費による研究や学会での発表など美術館活動に寄与する調査研究を活発に行っており、その結果として学会等から表彰されるなど調査研究の質の高さも高く評価できる。一方で、職員の業務量は増え続けており、職員数と業務量の適切なバランスをとり、すべての美術館活動の根幹になる調査研究に充てる時間を増やすことに努めることが重要である。

(6) 快適な観覧環境等の提供

国立美術館においては、企業との協働による障害者特別鑑賞会、多言語による各種案内など、障害者・外国人等への対応、展示・解説・音声ガイドの工夫、入場料金・開館時間等の弾力化（夜間開館）、キャンパスメンバーズ制度の実施、ミュージアムショップ・レストラン等の充実など、快適な観覧環境を提供するための様々な取組が継続的に行われている。

令和2年度は、オンラインによる日時指定チケットの販売を実施し、新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡大防止に配慮しながら、来館者の利便性の向上を図った。今後もより一層の来館者サービスの充実に期待したい。

平成19年度に開始したキャンパスメンバーズ制度は、加盟校数が前年度の96校から102校と増加し、積極的に加盟校を増やす取組を行った結果であり評価できる。キャンパスメンバーズは入場者数増加の方法としてだけでなく、日本の芸術教育、美術教育の推進に繋がるものであるため、さらなる広がりを期待する。

セキュリティ対策や防災防火対策については、来館者が安全安心に観覧する上でも、また国民の重要な財産である作品を安全に展示・保管するためにも万全の措置を講ずる必要があるが、そのために国立美術館が継続的に様々な取組を行っていることは高く評価できる。引き続き、十分に安全に配慮した取組を行ってほしい。

ただし、その陰で美術館の運営を支える職員の労力や負担が増えていることは忘

れてはならない。業務の増加に見合った人員増，予算増が必要である。また，職員の労働環境にも十分に配慮が必要であることを強く述べておく。

2 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成・継承

(1) 作品の収集

国立美術館は，我が国のナショナルセンターとして，我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成に努めている。

令和2年度は，法人全体として，美術作品については372点を購入し，164点の寄贈を受けた。これにより，法人全体として美術作品46,570点（寄託品を含む）を収蔵していることになる。収集方針に基づいて質的な充実とともに量的な拡大を続けていることがうかがえる。

収蔵作品数が増えていることは望ましいが，一方で収蔵施設がそれに見合っているとは言い難い状況である。継続的な作品収集を行うため，保管管理と一体的に進める必要があることに留意しつつ，引き続きナショナルコレクションの形成・継承のために収集方針に沿った作品選定を適切に進めていってほしい。

(2) 所蔵作品の保管・管理

未来に継承すべき多様な美術作品の収集を継続し，保管していくことは極めて重要であるが，国立美術館における収蔵庫の狭隘化は危機的な状況である。万全な作品の保存環境の整備を行なうために「収蔵庫等保管施設の狭隘・老朽化対応に係る方針」を法人として策定したところであるが，諸外国に伍する事のできる規模での新収蔵施設の確保は，法人だけでは不可能なため，国が主導して計画的に整備を進めてほしい。

また，作品管理は，外からは見えにくい活動であるが，美術館の根幹をなす活動であり，ここには相当な時間と予算が必要であることを理解してもらおう努力を続けるべきである。

(3) 所蔵作品等の修理，修復

令和2年度には，法人全体として201点の作品・資料を修理・修復することができた。

ナショナルコレクションをより良い状態で未来に引き継いでいくためには，保存修復活動を行なう環境や設備を整えた保存修復室の設置が必要になる。(2)でも述べたが，「収蔵庫等保管施設の狭隘・老朽化対応に係る方針」に基づき，修復を含めた適切な保管環境を整備することが非常に重要であり，計画的に進めてほしい。

作品の修理，修復は，表面的な数字では評価できない地道な分野だが極めて大切な事業である。経費負担，対応する人員などの問題を必ず伴うものであり，計画的な対

応が求められる。作品の修理、修復の重要性を踏まえて、専門人材の確保も含めて引き続き取り組むことを期待する。

(4) 所蔵作品の貸与

国立美術館は、国内外の美術館等への所蔵作品の貸与について、所蔵作品の展示計画、作品保存等に十分配慮しつつ、可能な限り積極的に取り組むこととしており、また、国内外の美術館等からもその役割が大きく期待されていることから、依頼件数も多数に上っている。

令和2年度は、法人全体として、美術作品については106件（うち海外6件）・625点（うち海外20点）を貸与した。コロナ禍の影響により、とりわけ海外の美術館への作品貸与が難しい状況となっているが、可能な限り積極的に貸与を行った。

作品貸与は、国立美術館としての当然の責務ではあるが、貸与1件についての業務量は相当に多い。作品管理と同様に、外部には見えにくい作業である。国内外からの要請に適切に対応していくために、適切な予算措置と人員の配置が必要である。

3 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与

(1) 国内外の美術館等との連携・協力等

国内外の研究者との交流については、各館とも展覧会の開催に合わせたシンポジウム、研究会等の開催や、国際会議への出席等を通じて人的ネットワークの構築を積極的に行っている。令和2年度は、コロナ禍の影響により、当初予定していたシンポジウム等の一部が中止又はオンラインでの開催となった。

今後も、積極的に美術館等との連携・協力等に取り組むことを期待する。

(2) ナショナルセンターとしての人材育成

国立美術館においては、美術館活動を担う中核的な人材を育成するため、主として大学院生を対象としたインターンシップ制度を実施しており、令和2年度は全体で23名を受け入れた。また、国立映画アーカイブでは大学生の学芸員資格取得のための博物館実習を実施しており、令和2年度は12名を受け入れた。このほか、公私立美術館の学芸職員を対象としたキュレーター研修については、国立美術館全体で3名を受け入れた。

コロナ禍の難しい状況のなかでも、各館がインターンシップなどを受け入れ、人材の育成に貢献した点は評価できる。現在の日本の教育システムのなかでは、学芸員資格取得後に、更なる美術館の専門職員を養成する確かなシステムがなく、国立美術館のインターンシップ制度は、貴重なプログラムである。

美術教育の一翼を担うナショナルセンターの事業として、各館の協働によって毎年実施している「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」は、令和2年度に、15年目の節目を迎え、記念シンポジウムをWEB配信で開催し、325名が視

聴した。

この研修は、全国の小・中・高等学校の教員や美術館の学芸員などを対象とし、教育普及事業の実践にあたる人材の育成や、地域における学校と美術館の連携を目的としており、研修修了者が各地域の学校現場等に戻り研修の成果を実践することで、鑑賞教育の充実が図られている。本研修は、ナショナルセンターとしての国立美術館が果たす重要な活動である。コロナ禍において通常の実施は難しかったと思われ、WEB配信という形で期待に応えたのは評価したい。

各館共に、業務量が多い中で、インターンシップ、キュレーター研修、美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修などを実施し、美術館の未来のために努力している姿が見られることを評価する。引き続き人材の育成に貢献していくことを期待する。

(3) 国内外の映画関係団体等との連携等

収集・保存と公開・活用を図りながら、上映会、巡回上映、映画の保存に関するセミナーなど様々な活動を行った。令和2年度は、映画フィルム82本を購入し、553本の寄贈を受けた。これにより、83,744本を収蔵し、映画フィルム42件・73本（うち海外14件・22本）、映画関連資料3件・55点を貸与している。また、テレビ放映や展覧会への提供を主とする複製利用は、23件・45本を数えた。

国内団体との連携として、企画上映においては、一般社団法人PFF、公益財団法人川喜多記念映画文化財団、公益財団法人ユニジャパンとの共催企画「第42回ぴあフィルムフェスティバル」、ワーナーブラザーズジャパン合同会社との共催企画「35mmフィルムで見るクリント・イーストウッドの軌跡」を開催し、館外上映においては、一般社団法人コミュニティシネマセンターとの共催企画「Fシネマ・プロジェクト こども映画館 スクリーンで見る日本アニメーション!」を開催した。

我が国唯一の国立映画専門機関として国内外の映画関係機関との連携をさらに強化し、映画フィルムは元より、機材を含む関係資料の保存に積極的に取り組むことに加え、活用・情報発信などの機能を強化することを期待したい。

おわりに

国立美術館の令和 2 年度事業についての評価は以上のとおりである。展覧会事業、上映会事業、作品収集事業、調査研究事業及び教育普及事業など多種多彩な事業が高い質を維持しつつ継続的、かつ適切に実施されていることが認められ、これまでと同様に評価したい。

令和 2 年度は、第 4 期中期目標期間の最終年度であり、第 3 期中期目標期間の評価結果等も踏まえつつ、中期計画において高い数値目標を設定し、事務及び事業の運営等の改善に努めている。限られた人員及び予算に加えて、効率化も図らなければならない厳しい状況の中、クラウドファンディングや遺贈の受入れに関する取組など、自己収入の確保に向けた積極的な取組を行っていることは高く評価できる。昨今のクラウドファンディングにより寄付文化がようやく一般的にも浸透し始めている。この機会を捉えて、手間がかかるにしても小口の寄付を集める更なる努力をお願いしたい。

コロナ禍において、海外からの大規模な作品貸与が制限され、改めてコレクションの重要性が顕在化した。この状況はしばらく続くことが予想されるが、そのなかで観客の美術館への期待は一層高まっているように思われる。今後は、これまでのような動員数を競うような大型の企画展だけでなく、鑑賞する側にたった展覧会も企画開催されることを期待したい。

同時に、各館の充実したコレクションを、調査研究を深めながら、一層公開・活用するとともに、国立美術館が取り組んでいる情報の一元的な検索・閲覧のシステムの開発・公開にも大いに期待したい。

報告書本文にも記述したが、職員数に対して業務量が多すぎるのが懸念される。美術館において来館者の目にまず触れるものは展覧会であるが、その実施までには膨大な調査研究、様々な実務があり、個々の展覧会を実施するだけでも大変な業務量がある。

また、コロナ禍により、SNS での情報発信やオンラインでのイベント開催など、広報及び普及活動の重要度はますます増えている。各館ともにそれを十分に理解して、魅力的な活動を様々に展開している。いずれの活動も高く評価できるが、一人一人の職員の業務が過重になっているのではないかと懸念される。

今後も国内外に誇りうるナショナルコレクションの形成・継承、質の高い展覧会の開催等その役割を十分に果たしていくことができるよう、適切な運営費交付金の確保、必要な専門人材の確保等が実現することを強く望む。

最後に、今後も引き続き、我が国のナショナルセンターとして模範となるべき活動を展開していくことを期待する。